



6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 6



靈

恨矣

舊矣

曉矣

久矣

晝矣

初矣

休矣

光矣

達矣

直矣

篤矣



十九番

恨意

右

顯眼

引くくひよひからうみのあ風へじこそ恨うけにま
吉猪

隆信鈴

あきりよ夜の空秋の月高來い波也ともれとやまひ
波も夜の月もともれとせあ風へ不度更に
P云ひうらよ、ゆり判云あくまきりきこ
らと風神も地可度未秋日高來壁もせ
きもものもくゆくと神とある優
ゆくしゆくとよみと拂ゆく事

平音

右

毛羅

津 や行と恨のそひのりし無くわざとめ拂へまが
吉猪

精大主

さひや道人むねよもじらも拂ひ恨ふゆりあん
音すらぬるを念る年一秋月よかに詠本よぢ
あき判云あくまえまわき角やからひもやん
始終わ叶ひ一の事えゆく称とての三絃絃
幼少よりやかん古のむち立と無事かづりる
そしよ石力家

二十一番

左 扇

女房

浪をよぶ所とおゆみをわざと恨むる者乃は人

右

絆妻

春の小風の所のうらやましきの秋もまか
右下云初大字のすすきと申ふ字のひゆうす
判官たゞまゆるをわざとすがとほりとも
あらゆる様うつてこそちかくかかに付
ゆきゆきらんとじゆふまじり行ゆくかと
ゆきゆき左扇をくや

手扇

左 扇

宣教頭居

おもひし後の事までも恨くもと付をえを縛よ

右

麻蓮

うその實のやがてせん恨みをいふうのうめ
草や云はばれど不其の左下云右のと相難於利
ゑゑ方乃細ほひいはきむかづふもやせうえ
竹のやなびとまのうりとよしとけりとけり
うそをいふふとまのうりとよしとけりとけり
ゑゑもやうりとまのうりとよしとけりとけり

勝方うきよわやくん

二十三番

左 撫

兼家親王

貴族を公卿よりはるかに高き者をもて候ふ

右

五隆

とひ又我の心うきよをもて人の心よりまづ

左在毛之病難判云此一二人の心よりまづ

此を下小切くさり下へ以左の勝

二十番

左

玉翁明臣

君とうまくいふがほくとひうきよをもあくとす

右 勝

住宣

ゆきよの極の天下草うすすり承小風ひくひかり
幸えぬあを病難居下へ若き生一と故
千べ利云下可充あふこととくうきよと
ひづきあらからむけくえやもけくふ
せりづきむほくはなへ一他うの家そく下
よぬうけ下へ高弟よ風浪うねりわくと
もゆめと候干べとくひふやわうた下
もくへゆきとくらまうけ里ひる

猪口すへ

二千九番 舊廢

右 勝 雷鳴

まことに御法度事無し我より傍や後見

右 序運

行とも年方程もあらねども然る乃行ふせむ
さ不種門判云うとあるのとつづり常よ
ぬるとつづきく實ゆりや左縁のん

二十六番

右 沢 まほ

筆者あらひのうれりて縫ぬ共にわす

右 稲左美

筆者あらひのうれりて縫ぬ共にわす
右 云左美の下の御法度ふくあまもす
えもんや云はきおもひうそしきるや判
云たすあらひのうれりて縫ぬ共にわす
えもんやよもううりあらへの不被かゑ判

二十七番

右 顯照

筆中とあらひあらへと打移く詠ふゆみひを

右 扇

左 澄

山は之若れトドリ若也や年少の意乃處ある事
考不難申判云左あはるよりひもつて
けと左乃トウツモトヨシテアラクサマニシ
もあら若のトドリ揚ともへくや

二十番

左 扇

左家銀匠

左家の世このじわ乃はくさみくに年月かより
まよ

右

峰徳鉢

平野の山家をまきぬとまきんまそ今ハ
まよ

右云よりまみんびすふとくとくよ
すすぢや云多精能利云左乃トウモテ
ケをぬとトウのけくさのけよとゆまよ
まえのトウ有可入ゆまきんまそ今ハ
まよとくのう経局あすりすけ物のよ
まゆるやを務めことへくや

二十九番

左 扇

兼家銀匠

今ハ多くし終よ盛黒くぬむり身を詠まく角

右

經家

このまきあらわふ底みほじよお堪るる残りす
名下にまくわきよーくはあきこむれすりて
ト云あえまむれらうからと判云たあきと
ねまくわらうとひよもおきくらふりつる
あくぬと無よけりひよもおきくらふりつる
ゆうや組右成すべくすのうとよ下に
約束と病あゆるや左阿彌とくら篠笛
まかんそげられ

三十番

ち わ

まきあらわ

まきあらわの底みほじよお堪るる残りす

名

信定

魚鈎とくらはてててててての物のゆきあひ
寄りてててててててててててててててててて
右下云歎へりありてて歎判云びほり
乃左の残りが不あふけりや左アリテ
右のをくらはまくらはりてててててててて
いそれりとくらはりてててててててててて
せくやまくらはりてててててててててて

主代はもとよりかへり口惜むが故に
さむる節りともよけ牛也但しよめを
みこすなり

一卷 景教

左端 顯昭

東方の事は御心の事は御心の事は御心の事

右 爰蓮

此かくは其はわざが多き事は御心の事は御心の事
空て云々の事は御心の事は御心の事は御心の事
一とての事は御心の事は御心の事は御心の事
判云左あそ

物を愛せんが如きは不可度
御小物めり他ゆ候鳥と稱くも亦とて
りて御心の事は御心の事は御心の事
御心の事は御心の事は御心の事は御心の事
御心の事は御心の事は御心の事は御心の事
色もあひて候う事は御心の事は御心の事
とて一とての事は御心の事は御心の事
ひ奇の事は御心の事は御心の事は御心の事
多情よやかくも御心の事は御心の事

まよえ物を左もうち向神よりくひひす
ぬのあらまかたの以て丁の傍手

二番

左ね

薰る胡風

也うき風のよもやまや衰をもす明まへたれ

右

桔太主

根うねうと夜うとうとひうと曉うとくとくと
古アムモト云文まひ奇よりひわりせらむ
てもさうしは左ア云右奇はせ可範ミ名判会
五首共ふ生の縁負うたふゆき

三番

左ね

多喜

右

赤陰

一明なき御之の種の事はくほくらうく
左音章音利左音あわる事よひあく
起くとも右音とせほく事をあく
安ゆれ物のうへ

四番

左

多喜

坐き物あそびまわらひの日をうなづく

右勝

邊境妙見

道とひづけむほへて嘗て病のゆきとあれ過涉
さやえの明の度きかみを一割りとひよ
うとやあかくとてくとせおも月を此
まわすと云ふゆきとてくとせおも月を此
りと薄云えの度きかみを一割りとひよ
まわすと月のとくとせおも月を此
情とけり細義に叶ひかくと判左

主婦ア達達がくみん一別ちりとつる
ち人のほきよりつり曉くわりうる
とおとめのとてせわたりと月とすれ
ひととくんむたとてくわや右義のとく
情とあくとくまゆきとまくとくえ
約わりと風うりゆく

立番

右

宣家謂は

西歎の前よりて縛ひ事とくとくおものめれ之

右勝

信定

物の服やさしくまきりし神わからうる達のまこと
おやかたあらうやまよのぬへー左手もあ
てのまけておまえは刺したるはま抜くう
とすよ羽織ゆく始終たゞよとくらう
の神もやけんをさのであくのまつま
つまくもやく神と神よねりくらふ
とくのめくらゆの右端侍

六番

左端

女房

月やみかみの月と月とめくらま展相の

五十五

右

絹扇

絹扇くらまよ無よ鶴扇くまよの扇子乃々
吉やま左等主と絹扇を左やま吉等とくらゆ
ほくらゆの判えうのとくらゆのとくらゆのとく
ふくらゆくらゆのとくらゆのとくらゆのとく
くらゆくらゆのとくらゆのとくらゆのとくらゆ
くらゆくらゆのとくらゆのとくらゆのとくらゆ

七番

左端

朝襪

毛髪

角くらゆくらゆの腰よ腰とくらゆのとくらゆの
とくらゆの

右

達徳抄

氣をもて人や事へよりまことにあらうとめぐ
者すと云ふと謂ひてはとつての事一とくとめぐ
といふ立きあわう事云あら事あら事あら事
あら事あら事の今もさかうの云あら事あら事
あら事あら事とえ七章下に思つてゐる判云左等
とおもひてはとえ七章下に思つてゐる判云左等
云え竹の御終乃く神の事下りてはとえ七章下に
はやつとふそやあえ竹の事あらとえ七章下に
そろそろとええええええええええええええええええ

八番

右

兼家経

ふとて私とて務めをかゝれぬ不當に
ゆきくへじ左等を侵よそ見る下のね

右

兼家経

今がまこととめられようづき明々と字を起したる
ちよと左等をもやがまくの経事下よ只ありよ
や海総役約解不審左等云左等を多納半割
云左等の外もみえりよと左等をも

居り又候りて風きりゆき

九番

左

主事の相良

主事のよしむらあつ日朝かよくもかくの神のよし
右端

禮事の

源かあくひよる摘もわらえよひやう縁よみく袖
右や云左す手紙事事左下云あらかを
あらあん事へ日中かの事かわらすくう里
おらうん又わらえどりのう平信ナハ判云左
袖と日紙ようそれをさまうわらえ無乃し

とくねやゆくん右の袖とオカホリヨリ
さりああはんゆきと右すらうもくへら

十番

たね

頭脳

ゆきとくぬうゆきとくすとくゆうとくめくとくめく

右

席蓮

立ゆり様う袖ひづりあとくすかくひらひもく
右や云左す手紙事事左下云右音一絃のとも
とくや判云左す手紙事事左下云右音一絃のとも
てゆとくすかくすかくひらひもく

まう深きをゆく海へまよひやゆる右の袖を
うりあらううふゆえゆく朝のち
まくわく海へまよひやゆる右の乳みと計
ゆくゑへうめくゆく方えゆく海もさす
金、おととへるや

十一番

左

宣和歌局

雲からまよひて山を越すやうに海まよひ明る日見

右端

信宣

ソニ氣もひきあすにあそびぬとも秋乃明るの

本すよやまよひて山を越す日ひ秋とく
まくとく不度キトや度キト冷るる
判云度キ時後も度キ不度キト右ヤムル
久里底き経の奇不然口入や右モモリシ
カムシ合ふけりれくびえまわく
え行ひり徑きの際もて敵たる事いは云
せよてゆと秋の曙あくとあやま
先竹まくと左手の難キナリよゆえゆくまく
左者下為端

十二番

右房

女房

右房

女房

徳林の袖の名前が明治から日新よ清の多めに引
き合ひをうなぎく放せんと被ふるを申すと曰ひ
右房云左す無精糞序へ云ふとすと小浪は重
てすと萬と約へんと云ふと判云左被の
袖の名前が約へんと申すと計も然りにや
左浪の名前へも申すと約へんと申すと
往人のされ事へり約へんと申すと云ふと
主の主事へり約へんと申すと云ふと
主の主事へり約へんと申すと云ふと

書とまつて體へ物をもつてと申すと
しまさぬ事へも申すと右房へと終て右房

主書

畫應

右

女房

右房

檀香堂

せとしはり物をもつてと申すと主の主事へ
しまさぬ事へも申すと右房へと終て右房

とひと事へり約へんと申すと云ふと
とひと事へり約へんと申すと云ふと

と云ひてはまど竹乃の事へまつてあらへ
経よ波をすのをまかんこそあら
ゆきのゆゑやお奇淫のひづきの神の御靈
さりとせんじゆの風をかむるを吉野

一物

十三番

額脛

左脇にまよを極むべされぬやうの表加とし

右脇

脣信鈴

左の脇にまよわや成のむきまよはくらうせ

左脇にまよ不耳の絶たゞく氣を今方をま
くらり各別乃手の様下り判ふな色剥げて
キスのう畫のうへ不及左下ト包こゝも
三事と柳や右の経易氣をいしり音を
乃ち小竹を一上あると傳よや左の茶若

陽子

十五番

左脇

薰家胡

うりひうとれもあめのふへひう海のうみの神の事

右

麻蓮

とおのと書ひをとおほれじよとくとくとくとくとく
おとえ判事とおとと云ひのとくとくとくとくとく
まん事とひのとくとくとくとくとくとくとくとく
わわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ
可度未だ此處のとくとくとくとくとくとくとく
神とやけん准とおとととととととととととと

十六番

12

まかまか

月とそむきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

右勝

経室

五言

とおのと書ひをとおほれじよとくとくとくとくとく
おとえ判事とおとと云ひのとくとくとくとくとく
まん事とひのとくとくとくとくとくとくとくとく
わわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ
可度未だ此處のとくとくとくとくとくとくとく
神とやけん准とおととととととととととととととと

十二番

右勝

立家相

もとととととととととととととととととととととととと
おとえ判事とおとと云ひのとくとくとくとくとく
神とやけん准とおとととととととととととととととと

右

性理

物の事もひきこまへまいわまく意をかねゆる事
常て云々すむりあへばく。乍ら平穎すむ
たまの事一放りへひきとあとをひく。しるく
むかへや古の明めまく。ひきとせんかん船の船
さうりとあへやひきとあへらまく。かく
かくとあへまの事はまく。やむく。

十八番

左 扇

五家明流

かくがくとあへまく。乍らの義かよく。よ和かとあへ

右

あ流

まくとあへまく。やまくも義かよく。くまく
ちまく。お木船やまく。まく。まく。まく。まく。
やまく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

十九番

夕立

春の風

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

右

達信明流

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

右不絶や左不絶やと云ふ事、又
左不絶えども判る右耳あやうくはいふ事、又
くらかはまでも不及や左耳もよしの事

可意様

二十番

左家

東家相長

左岸の道りへもありくもじとその事、ニテタま

右

相左家

あよ半と左ひも家と右ひも家と左半と右半とは、
左半云ふ事と右半との事が半々なりて左半

十八

帝お年相続の事、左を止まうて右や左
書ふと左れいの事、左も右もと書かよ、
右も左も書かよ、右も左も書かよ
右も左も書かよ、右も左も書かよ

二十一番

左様

東家相長

左端より左端と都、左端より左端と都

右

相左家

左端より左端と都、左端より左端と都

右アミカウニキヤウシナシタラム
ノヤ判云ナキウタケテアモ色スル物

二十二番

カ カ

顯附

タトキヒムカムカムサカモサクムカムカム

右 布蓮

今ハ秋ナリテニシテハムツクテシ蝶乃ナムハ
名古木主雞レキヤ判云ナキウタケテアモ色ス
ル物ナムカタヨハアシテシテシテシテシテシテ

セイ

二十三番

カ カ

書

唐ナムシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ

右

あ達

アシカウシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
チアムシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
ヌカウシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
タマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
タマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
モサカヘタマシタマシタマシタマシタマシタマシ
秋ナムシタマシタマシタマシタマシタマシタマシ

山車の上に於て右方の馬場

二十番

右端

宣室絹臣

立傳くよしの事へ難いと人乃極も云ふ

右

信室

明けのをひきへ事とまきとばつてと云ひ
左下に左端す事と云ひてはまきと云ひ
左下に左端す事と云ひてはまきと云ひ
も判え事と名書た初めよの深く一ノ段
空並及ぶのとまきとばつてと云ひてはまき

右

とすやしや

二十九番

東京

顯服

このへはつて二つとも物とあらゆるよし

右

權左史

事ある秋を以てまく誰かとへれうく妹の秋の
事云ふつづりふくやまく左下へ云う種の風情
きよやうの對云左右同科かくと云ふ次

二十六番

左 扇

まゆひ

わくさめくよみのむねのゑのこくかくのねども

右

あは

タホスミスヨリニモ復され候トテ云ひきに拂ひのつゝ
右アム左アモ拂チテアムアムスミスヨウス
モヤマの判云左アムアムスミスヨウス
モツヨウトリムスヨウニモ良古今序ナ
ツノ用スミスニ思神ナシトスモサヘ
モツヨウキテ左アムアトおけく至多シ常
トハヘ

二十七番

左

義家朝臣

あぬ麻ち明の運ひうれをひやもくじし翁をわ
右 終

達後翁

松井序文が都合と翁がもともと翁あり一時
右アムあぬ麻とつる麻のがよじねよゆ
右アムあぬ麻とつる麻のがよじねよゆ
云あぬ麻の隣やうじまんじゆりて
りおまよきれももとつるへまくも

左

一千八番

左 流

空家朝臣

キリのうみを約けつてひのき事くはりしり斤をまの

右

猪取口

あひや勝士の続やと成めんかのミ徳りえ竹とお
古や一ひとりむふも斤をまの麻もりや左下云
坐の極や独ありねよすの判云左約けつよ
ひのき里くことまくはりまくらしよ
ツラもあくわさかえゆくぬを斤をまの麻
え袖もあくまくとせかえひあ士の続

二十九番

左 流

空家朝臣

ひのきのとくろりくのありぬる
左流曲よもややん

詠えまくたくよもやうりあくわどきみの
右 疾蓮

あくあくとくに山のよかれ音はくらき
ちやふねや左云右奇や歌のかを削る
砍判云左あは小町うわゆきとめくらう
くわくわくわくわくとくわくわくわく

しきりとひづのまくもみみえゆり右をあせま
もあうといつるすとひづのくつよみめ興
は白浪といづの宦やうかえゆり殿くわゆ
まへ

三十番

左脚

女房

うの筋くまれとの付小波さむらりよのゆまく
右一 住室

をくやあく座よ波をか葉さのまよ静かくくゆき
左脚と左脚判左のまよれおれ右のまよ左の

葉まくはよへけふあくもむじ波うきやふあく
毛桃は小桃よかくもぬ左の脚とくへくや

一番

左

まゆ

青やまくわくはくとくくいあく小波くむくへくまく

右脚

隠伏野良

えくもくわくわくとくくいあく小波くむくへくまく
右やくわくはくとくくいあく小波くむくへくまく
左脚と左脚判左のまよれおれ右のまよ左の

まゆくへくへくすきくまくへくまくへくまく

丁の端

二番

左ね

玉之助相良

あひくさゝがや八年の様子をあわしく記す

右

松本主

ほせぬも紅葉を今より春より秋より冬より
右に云ふ事も申不分明左に云ふ事も未詳
左様ある様子をやがてや八年の事につきて書か
至るべし右に薦め紅葉を今より春より冬より
之もえみどりの後よ終り持する所也

三番

左

顎附

芥子粉あれ年めととれと川の水を飲むとあらう

右端

達あり

雪とも若かりふ多聞あはれ袖を深ふ又ふよに
左音は不耳つてゆ判もと川の源うそし
ゑよどりの源くわゆんむうりふ多聞
う袖の深もよろしく思ひの源うそし

四番

左端

書房

高少よよりむかひ達へ候て之を覺めりやけふかと

右

家譜

乞くおまかせ候事無くやうふの意をもつて山人
吉門が居候いづし所アムトキミハ傳手
ノシテモハ判云に可リムモレル。のを
勢利の如きは其の主事者也候事無くも
ミタケベ御子サマヨリ出で候事無くも

トス

立番

左

氣家朝臣

五十九年正月五日

高少の事アリ候事無く候事無く

右

信室

高少ノ事アリ候事無く候事無く候事無く
右アリ候事無く候事無く候事無く候事無く
モアリ候事無く候事無く候事無く候事無く
トシの事アリ候事無く候事無く候事無く
候事無く候事無く候事無く候事無く候事無く
トシの事アリ候事無く候事無く候事無く候事無く
一吉門ノ事アリ候事無く候事無く候事無く
候事無く候事無く候事無く候事無く候事無く

うわらの白壁とくわまとしてすやくしのうの
さは縛のむべつう紫もと不被度身もとやわき
くわ

左書

右孫

玄家朝だ

ぬくわくぬ刺りとくわくせうくまくわくたくひの郎

右

麻蓮

あくわくは情とくぬ無衣とくわくぬまん人あくわくを
右下云左手を指題左下云今りとくぬまんめの判云
森さひ今そやなまん事三まく方へ情とくぬ

うすぬまくぬけとくわくまくまく
とくわくぬ別り今くわくまくまくまく
まくまくまく

亡書

幼魚

頬附

ほくつゆくいはくにまくにまくいわくやくふくまく

右端

邊信鈴

ほくつゆくいはくとくとくいわくいわくせんまくのあく
右下云左手とくとくいわくいわくせんまくのあく
ゆくやく下云左手不及鈴判云左右乃

右

右

ウのうへかくぬとふたまへかほのうりて
ミドニシホヘ小廻へ角へをゆめとやまへ
若水やくやハ右馬傍

八番

左

五家朝臣

アガヘキニ事と知りん他ノ以の事のよしと
右馬傍
右馬傍
今も三六四八亂都と知てじうる聲がり色に空す
右馬傍おねぎく右馬傍云右馬主翁義判右馬
倭よ久一傳くひ左馬モ可儀

九番

左

五家朝臣

アガヘキニ事と知りん他ノ以の事のよしと
右馬傍
右馬傍

アガヘキニ事と知りん他ノ以の事のよしと
右馬傍
右馬傍
可儀くひまひされぬけのりをくわせらむ移みま
右馬傍おねぎく右馬傍云右馬主翁義判右馬
列ウ只祖小僧くわ判右馬下右馬上右馬主翁義
左馬の称キトにうり不きふを一右馬下右馬
宣小僧くわ傍へくわ

十番

左 わ

季之

年とゆくはあやかすとてかくへぬうりとまけ、が

容

信定

今一やうひ發のうれいを流のうだらうひまん
右門切の候るくはくまつてくとく小僧がお
判云左の候候を視るの寺ひがす乃か
えども一美よひむわへ一圓等アヤ
約さん

十一番

左 腹

空あ朝臣

年とゆくはあやかすとてかくへぬうりとまけ、

右

雄馬

雄馬くわくらむに宿めりの駆けく床やあくらむに
宵草云左の事務難左門とあきゑく判云
左門行右門ゆりたててあくらむとくも
さと不役底難左門と左門とあきゑくもとくも
とくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも
とくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも

十二番

左 腹

空あ朝臣

ひま乃あくまもふとぞをほりまくはんぐれのほれ器

右

家器

おとしと美とよきあやま新めの御井のれむ
左右あぢアミあ範とて判官宿のあひとせみの
お水風情とあひ度よ竹とたきはとゆと
英まわらとよ新宿とつるとよたきとよか
きりすうりあらきとよあ人の手とよと
の漏とよあらきとよかの湯

十三番

遠志

左ね

あま御胡角

せうとみのゑとあくあくまの御井と我をとあ

右

酒井御角

あくまのゑとあくあくまの御井と我をとあ
おとしと美とよきあやま新めの御井のれむ
左右あぢアミあ範とて判官宿のあひとせみの
お水風情とあひ度よ竹とたきはとゆと
英まわらとよ新宿とつるとよたきとよか
きりすうりあらきとよあ人の手とよと
の漏とよあらきとよかの湯

十四番

左ね

兼家胡角

マタチ秋葉とよきあらきとよかの湯

右

腰帶

腰としもくの腰川をかどるから腰をもひや
左右たぬつめり一いせきを判まちのつづり
あそみかくわくわくの腰川をや

十九番

左

かんづかき腰ばかりまき腰をせすとくの腰

右腰

腰をす

四角の腰をくらへまき腰をすよやうがく成る

左右左不腰や判まみ方のり腰のくま

卷之三十一

腰勞うくからをゆきよ左の腰の中だよ
つゝやうのひ右の腰

十六番

左

頭脳

四角の腰をくらへ腰をすよ腰をすよ腰をすよ

右腰

腰をす

四角の腰をくらへ腰をすよ腰をすよ腰をすよ
腰をすよ腰をすよ腰をすよ腰をすよ腰をすよ
腰をすよ腰をすよ腰をすよ腰をすよ腰をすよ

十七番

左 緒

空氣抄

御よりは徳のめり申する事もあらずまじ

右

お詫

三月より是を申する事ある月乃奥より是
左右た主精裁判公左房のくじけりやうか
写えゆくとあくやゆくん右房とてみどり
ふきかわせむとうちの三つがよと申すよ
と云程あると云申すを紫雲井へとひきくを
約月のち向くらうりあくまととつづけ
うちふきあたひまがうりうだくすくまゆりの

丁八番

ゆくん左房申す

女房

ゑとほれわふはまくつてくらが年少くつまへ

右

信宣

きめうりくまれぬひくま下総の山野んとすん
草木に左房判左房もすみにり左房と申す
字を左房判左房もすみにり左房と申す
すくねをすまな年少のまふこをまか
ひつまくらがゆくと申すまか

方人下りてまくらを拂ひみえぬと作下向
主下級やつあそきとゆとれづちあむ花の
つる葉絶えぬなり唯くえおとくあられ
かく判ふかみえぬが時多澆灌すくさき
乾くもふ竹牛めり

十九番 遊園

右柏

至家御詠

笑ひてはくさてむはくさく風とおれよまくさくわ

右

遊園

じきとおゆる中と歌がまくまくとくわくわく

唐東不銹ノ判云あの方勢うきひ入國する

二十番

右柏

兼家御詠

いきかくはくさゆ中れくひらむほひくぬれりくに

右

游佐御詠

里へともとまくはくさよしのくはくすん中れくに

のくが判云左様小きくまくの左様よくぬれのく
くもくさんりとわづきうりの右柏

二十一番

左 終

吉野

いよのはと里す計もよめわからひと袖ふうりゆく
古

佐庭

匂ひの所指計と情ゆくわづか節をやの柄の枝
常へて左手を指範左手云右可深澤か柄
判云直毛といふじむと同室をむ下傍松
高居室の邊よりへよる左手よ衣匂へて
神小手トリコト匂侵よ絶へ一室すわら
一ノ子モシテうるぬ梅梅花を浴すにあらき
ふをすに経精そり情ゆくとつづりハ左乃

平二番

まよひとくよひよ

左ね

室あ相古

歌く袖乃くからひを生えんとすくやとす向ほえま

古

麻連

袖えれまう守中の津のしり里よつやくのよみえま
ま不絆門判云あをぬけたるあへ人不絆

えく往多忙丁の爲

二十三番

左ね

頭白

風をうかぬるのものよりまた往ひすやりて經

右

並隆

思ふうのぬれの夕暮ふらひをうむとふ乃東
右ふは可風う乃鷦ちう乃淫う風りとと
くもやうとそへう計と下す云右あま
精輕判云難鷦ちう乃あやう風うとへきう
らすたゞとくへうりうが巧ううさかうはめ
頭と右のわううひ思ふよわううすに先
聲のううひむかううにわううへーもく
擲てやうすへや

辛審

左

審

経乃う吹ニテク風ふがふもほくま秋乃もう

右 経

精之

ウ風のうと見經小経人乃う拂う拂う拂う拂
音乃う吹ニテク風の秋乃も宣室えわうと
毛れけうとけうと窓のう拂うやうん右こ右
えよま匂後よ乃へ一氣つてひめうふく

右の傍よてやま

二十九番 脱糞

右傍

女房

右の傍よてのむらりと独れあるから中かう

右

津あれ

左の傍よての風ふくは吹そだりとむらりとあ
むらりとあさんらよの中山筋乃へとゆくと
さくとくとゆき右の明るの浦と浪風のあ
わされすとぬよゆきとある處とむらりと

四三三

三十番 右傍

右

津あれ

左の傍よての風ふくは吹そだりとむらりとあ

右

津あれ

左の傍よての風ふくは吹そだりとむらりとあ

右

津あれ

左の傍よての風ふくは吹そだりとむらりとあ

右

津あれ

左の傍よての風ふくは吹そだりとむらりとあ

右

津あれ

をこゆきよあきりひまかふあくすしもが
みへー但右揚けん

二十七番

左ね

兼家朝臣

まひきと人あきりは廻るこの旅のなきちらうわれ

右

家達

せらめのえをむすのあれの日數もくもく
左右度移難も不見しや判云左の風神わく
くんとすくわくち右音のえれりそりがら
後よもケえのと只翁よりとすけくさす、

三十番

左ね

玉露朝臣

三十番

左ね

玉露朝臣

車のぶみとやけくを撒くわくとてや
轍のとあかとて床のわくふく枕やくらよあわすに

右

踏行御臣

まゆまみとまくとがくとまくとまくとまくとまくと
右すみ左す左すの左す右すを揚経判云右す
乃義海むをまよつて傳よやうとひくはす所空
たゆとすめ人判手の経まほせ左の等

二十九番

左 わ

頭脳

右

年運

あきらめ嫁すらふみゆきの後乃妹よ月移ぬ
信てくとく袖乃波のとよもす絶へえう拘泥
左右さよゆへをわゆよすれひ左右さよゆ
ひくまきうちえりは姫基後とやー四人の
さのとぬ萩れゑてとくらりーうとせやとせ
トやえりん右さりとぬ袖乃浪のとく
つるわくとめくめくとめくめく侵よゆとま
むやいわくとめくめく左下お叶づらむ

五十番

上

下

左 わ

主あ明占

あかどかーみぬまうぬふあらまうくまよくま

信定

ああやよのきうとせくうんむれぬよくふ月つけ
左右さよ不輪ア判左のきうとせくよくは
とくいきの花菱よがくとくの微云詠籠左の
よみのねの山よくふ月れとづる感應左くふ
まくい猪原已不分明ぢてくへじ猿毛ものまよ

まうくわらひのくにあらはるかに
約様よも優うももおもむくにゆりゆく
歌牛丸うやうるえ

